

新貧乏物語

表題と写真は中日新聞元旦からの特集である。興味深い今日的なテーマなので、連載が楽しみだ。序章から。

2016年が始まった。ちょうど百年前、日本で初めて労働者を保護する「工場法」が施行された1916（大正5）年、こんな書き出しの評論が世に生まれた。【驚くべきは現時の文明国における多数人の貧乏である。】筆者は経済学者、河上肇（1879-1946年）。近代日本の本格的な貧困研究として、ベストセラーになった「貧乏物語」だ。



河上は物語の中で、英国など当時の先進国の例を引きながら、ある指摘をしている。【肉体の健康を維持する費用のみがわれわれの生活に必要な費用の全部ではない。（中略）貧乏線以下にいる人々をもって貧乏人に編入するのみならず、あたかもその線の真上に乗りおる人々をもやはり貧乏人として計上するのである。】食べるに困らなければいいわけではない。社会の真ん中からこぼれ落ち、底辺すれすれで苦悩する人々も、また貧困である一。かみ砕けば、そういう意味。ならば今、私たち日本人は河上の指摘を、過去のものとして片付けられるだろうか。

河上が「貧乏物語」を書いてから百年の年を迎えた今も、格差が生む貧困がこの国に存在する。【貧乏人はいかに多くとも、それと同時に他方には世界にまれなる大金持ちがいて……】【貧乏が人の肉体及び精神の上に大害を及ぼすという事は、必ずしも小学児童に限られているわけではない。】河上の時代も平成の今も、貧困は社会の隅々にはびこる厄介者だ。戦前を考えれば、あのころの日本は大地主と小作人、財閥と零細業者といった途方もない格差に目を向けず、対外侵略による利益拡大に突き進んだ。その果てに待っていた戦争という魔物。この国は、また同じ愚行の入り口に立っているのか。ただ、「貧乏物語」は、こうも指摘している。【思うにわれわれの今問題にしている貧乏の根絶というがごときことも、もし社会のすべての人々はその心がけを一変しうるならば（中略）問題はすぐにも解決されてしまうのである。】もちろん百年前とでは社会が違う。法制度も異なれば、人々の価値観も様変わりした。だが、困窮の現場真っすぐに見つめ、一人一人が現実から目をそらさなければ、それはきっと、貧困をなくす大きな力に変わるはず。

だからこそ、今、新しい「貧乏物語」を紡ぎたい。声なき声に耳を澄ませ、まだ見ぬ光を探すために。

（2016年1月7日）